



知音

初めての合唱祭はどうだったろう？ さすが3年生の合唱である。8クラス中6クラスは、どのクラスが優勝してもおかしくないくらいの演奏で、最初に梁田賞が発表された時は、総合優秀は別のクラスに行くのではないかと思っていたのだが、ダブル受賞でたいしたものである…と書いたが、私としては、他にもイイクラスがあったような気がする…。

1年生は、やはり新人賞のクラスは一つ上を行っていた。君たちも聞いていて素直にそう感じたに違いない。選曲がよかったし、指揮者もプロっぽかった。そして、何より一体感が一番あった。どちらの曲も難しい曲ではないが、しっかりと仕上げたあって、審査員の●●先生がおっしゃっていたように、「春に」の歌い出しの「この気持ちは何だろう〜♪」で、その思いがしっかりと客席に伝わってきた。全員が大きく口を開け、指揮者を中心に、全員で声を届けようとする真摯な姿勢は、客席から見ればよく分かる。同じ学年の担任として、ああいう演奏ができるクラスがあるということを誇らしく思う。

翻って15Rはどうだったのかというと、これまたイイ演奏であった。●●先生も講評で「思いを客席に届けようとする姿勢がよく伝わってきた」とおっしゃっていた通りで、新人賞のクラスにも劣らない、まじめで一体感のある好感もてる演奏であった。ただ、担任として厳しく言えば、やっぱり「カントリー・ロード」が固すぎたと思う。もっと楽しみながら声を届ける余裕があれば、さらによ

かったのではないだろうか。●●先生が「「はじまり」は声が出ていたのに…」とおっしゃっていたのは、そういうことであって、もっと笑顔で口腔を広くして歌えていればなあというのが率直な感想である。

でも、「輝輝乎、若行六月樹間」（光に包まれながら、さわやかな初夏の林を抜けて故郷へ急ぐ）ような思いは伝わってきたし、「悠悠乎、若行空」（悠かな時間と空間を見つめながら、その時空を自由に飛び回る）の世界もしっかりと感じられた。

*

合唱祭委員長が最後の挨拶で「合唱の楽しさを伝えたかった」と言っていたが、それは伝わただろうか？ 合唱なんて…という人もいるだろうが、日比谷で君たちに残された合唱祭はあと2回、合唱と縁がない人は、その後に続く長い一生で、二度と舞台上に上がることはないかも知れない。そういう「一生で最後」という経験を、君たちはこれからたくさんしていくことになる。体育祭だって星陵祭（●●くん「青陸祭」ではありません…）だってそうだ。年寄りには、「経験できなくなる」ことの意味・切なさがよく分かる。しかし、自分自身ではもはやどうすることもできない。だから、若い人たちに、いつかは取り返すことのできなくなってしまう様々な経験を、少しでも貴重な思い出にしてもらいたいと切に思うのだ。しかも、ここ日比谷には、経験を分かち合うにたる素晴らしい友がいる。どうか思い出深い日々を送ってほしい。